

## マレーシア、ムヒディン新首相誕生も政治混乱は必至の情勢

～マハティール氏は依然返り咲く意欲満々、仮にムヒディン政権樹立でも政権の行方は見通せず～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部  
 主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522)

### (要旨)

- マレーシアでは先月、与党連合内の亀裂による政治的混乱の表面化を受けて、マハティール氏が首相辞任を表明した。この背景には、マハティール氏が選挙公約に掲げたアンワル氏への首相禅譲を先送りし続けてきたことがある。先月末の幹部会議を経て落ち着いたかにみられたが、連合内の「反アンワル派」が離脱を決定したため、マハティール氏は政治的痛手の最小限のために早期に辞任を表明する事態に追い込まれた。
- 当初はマハティール氏の再任に向けた「出来レース」とみられたが、最終的にマハティール氏とともに政権交代を実現した立役者の一人であるムヒディン氏が新首相に就任した。ただし、多数派工作のためナジブ元首相が率いる前与党や宗教右派と連立するなど次期政権の行方は見通しにくい。他方、マハティール氏も返り咲きに意欲をみせて多数派工作を仕掛けるなど、新首相は誕生したものの政治混乱は長期化しそうである。

マレーシアでは先月、一昨年の総選挙において独立後初めてとなる政権交代が行われるとともに、15年ぶりに首相の座に返り咲いたマハティール (Mahathir) 氏の『後任人事』を巡って与党連合である希望連合 (PH) 内で亀裂が生じるなど、政治的混乱が表面化する事態となったことを受けて、最終的にマハティール氏が国王に辞表を提出する事態となった (詳細は2月25日付レポート「[マハティール、首相やめるってよ](#)」をご参照下さい)。こうした事態に発展した背景には、上述した一昨年総選挙において、マハティール氏がかつては自身の腹心ながらその後宿敵となったアンワル (Anwar) 元副首相と恩讐を超えてタッグを組むとともに、政権交代後にはアンワル氏への禅譲 (向こう2年を目途) を公約に掲げて政権交代を実現したことがある。なお、総選挙後にマハティール氏は首相に返り咲く一方、総選挙の際にはかつての同性愛行為を巡る有罪判決で収監状態にあったアンワル氏はその後恩赦を受け、一昨年の補選で政界復帰を果たすなど (詳細は一昨年10月15日付レポート「[マレーシア、アンワル氏政界復帰で注目される「禅譲」の行方](#)」をご参照下さい)、そのお膳立ては整ったにも拘らずマハティール氏は禅譲実施の時期を明らかにしない状況が続いた。こうしたなか、希望連合のなかではアンワル氏が率いる人民正義党 (PKR) をはじめとするアンワル氏への早期禅譲を求める勢力と、マハティール氏が率いづマレーシア統一プリブミ党 (PPBM) 内でマハティール氏による任期満了を求める勢力との対立が強まる動きがみられた。さらに、政権内では元々アンワル氏の側近であったものの、マハティール政権で経済相に抜擢されたアズミン・アリ (Azmin Ali) 氏などが『ポスト・マハティール』として頭角を現す動きもみられ、アンワル氏にとっては自身を飛び越える形で一気に世代交代が進む可能性が懸念される事態となっていた。こうしたことから、先月21日に開催された希望連合の幹部会議において、アンワル氏は政権公約の実現に向けマハティール氏に対して早期の禅譲を求める一方、会議では結論を首相に一任することで決定した。しかし、24日にアズミン氏のPKRからの除籍を理由に同氏を支持する

議員数名が新党結成に動く方針を明らかにしたほか、P P B Mなど元々の『反アンワル派』とされる勢力が希望連合からの離脱を決定したことで、希望連合は首相首班指名に必要となる議会下院（代議院）での議席数が半数を下回る可能性が高まった。さらに、足下では中国での新型コロナウイルス（COVID-19）の流行に伴い同国経済にも深刻な打撃が及ぶ懸念が高まっているにも拘らず、政治は機能不全状態となるなど有効な手立てが打ち出せないなどマハティール政権の屋台骨を揺るがしかねない状況にある。こうしたことから、マハティール氏としては自身に批判が及ぶ事態を避けつつ、今後の政党間交渉を経て首相への返り咲きの可能性を残す観点から、早めに辞表を提出することで痛手を最小化する狙いもあったと考えられる。

事実、マハティール氏自身は暫定首相となった後も、与野党の結集による大連立構想を掲げることで首相への返り咲きに強い意欲をみせる動きを示したほか、アズミン氏やP P B Mなど『反アンワル派』も当初はマハティール氏を支持する姿勢をみせていたため、最終的には一連の政治的なゴタゴタの後でマハティール氏が再登場する『出来レース』になるかとみられた。しかし、アズミン氏やP P B Mなどの『反アンワル派』は仮に大連立によりマハティール氏が再任された場合でも、その後にアンワル氏への禅譲の可能性が残る可能性を懸念して、一転してP P B Mのムヒディン（Muhyiddin）総裁を首班とすべく、ナジブ元首相を中心とする最大野党の統一マレー国民組織（UMNO）を軸とする野党連合の国民戦線（PN）、総選挙前にPHを離脱して第3極となったイスラム主義政党の全マレーシア・イスラム党（PAS）、地域政党などの支持を得る形で連立を組む構想を明らかにした。その後マハティール氏は今月にも代議院が招集される形で首班指名投票が行われる方針を明らかにしたものの、アブドラ（Abdullah）国王がすべての代議院議員と個別に面会して首班指名に関する意向を確認した上で、アブドラ国王が各党からの候補者の推薦を受け付ける形で新首相を指名する方針を決定した。結果、1日にアブドラ国王はムヒディン氏を新首相に指名したほか、同日開かれた宣誓式を経て正式に第8代目となる首相に就任した。なお、マハティール氏は代議院の半数を上回る支持を得ているとして、自身こそが首相就任の有資格者であるとの考えを示しているほか、9日にも開会する次期国会を前に引き抜き工作を激化させるなどムヒディン新首相への不信任決議などを通じた倒閣を目指す姿勢を強めており、引き続きマレーシア政治を巡る混乱は続きそうである。ムヒディン新首相自身はナジブ元政権下で副首相兼教育相を務めるなど、マハティール氏と同様にUMNOの有力政治家であったものの、ナジブ氏の肝煎りで設立された政府系ファンド（1MDB）を巡る汚職事件に関連してナジブ氏を批判したことを理由に更迭され、最終的にUMNOを追われた。その後マハティール氏とともにP P B Mを設立し、マハティール氏の腹心として同党総裁に就任して政権交代を実現したほか、一連の政治的混乱でも当初はマハティール氏を支持する姿勢を示していた。しかし、最終版でかつて自身が属したUMNOなどの支援を得る形で一転して首班候補に躍り出る姿勢に転じ、結果的にマハティール氏を裏切る形で新首相に就任した。仮にムヒディン新首相の下で新内閣が発足する場合、ナジブ元首相が率いるUMNOや極端な宗教政策を掲げるPASが参画することが予想されるほか、ナジブ元政権下では強権姿勢が強まる動きがみられたことを勘案すれば、民主化に逆行する動きが強まることも懸念される。さらに、ナジブ元政権下では中国への急速な接近が進む一方、マハティール氏は等距離外交に修正する動きをみせたものの、中国への最接近化が進む事態も予想される。他方、一昨年の総選挙ではナジブ元政権下での政治腐敗や

ナジブ元首相の妻を巡る問題などが政権交代の底流にあったものの、一連の問題が明らかになる前にムヒディン氏がナジブ元首相に近い勢力と合流して政権発足に動くことは、国民の間に鬱積する政治不信の増長に繋がりがねない。一連の流れを受けてマレーシア政治が逆流を始めるとともに、成熟化することが出来ない展開となることも懸念されよう。

以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

